スローガン

稲宮　健一

生命科学の権威、中村桂子が地球四十億年の人類史の新書版を出している。大きな主題を簡単にまとめた。人類史で狩猟採取の時代は原始的で、農耕文化の時代へと進歩していったと理解されているが、人の幸せはその通りではないと書いている。通常は農耕社会へ進歩すると、食料の余剰が可能になり、農業以外の職業が生じ、文化の向上に寄与し、社会の発展を促すとなっている。

狩猟採取時代は一つの集団は百人前後で、収穫物の分配は平等であり、集団内の争は少なかった。これは必ずしも居心地の悪い時代ではなかったようだ。しかし、高度な文化を達成したのはエンゲル係数が下がり、食料のためでなく自由時間に多くの人の間で議論を交わし高度な思想体系を確立ゆき、質の高い社会の構築が獲得できるということになっている。しかし、かつて字数の少ない詩歌、俳句などを第二文学と言って、差別する議論があった。高度な思索があってこそ、現代であると主張された。

しかし、昨今の社会の風潮は短いスローガンあるいはシュプレヒコールで集団は動いているようだ。丁度、狩猟採取時代に「獲物がみつかったぞ」、「獲物はあっちだ」、「矢が当たったぞ」という短い単語で集団が動くようだ。現代でも集団を動かすのはスローガンであることに変わりない。その短い単語の背景、論理的裏付けが十分理解できている人が二割だとすると、あとは単純な単語に共感する付和雷同型かもしれない。丁度、昔の狩猟採取の痕跡が今の社会に残っているのかも知れない。

ＭＡＧＡもそれに類する。石油をどんどん掘って、高品質な鋼材が生産できない古い製鉄所でもくもく煙を出し、温暖化なんか嘘だ、海外に勝手に高い関税を掛け、結局自国民に高い輸入品を買わせる。国際協調などより、自国第一主義、何か国際連盟以前に先祖帰りしたようだ。今世界は密接につながっていて、どこかで安定が崩れると、どこかで反作用がでる。その反作用が暴力でなければよいが。

（二〇二四・十二・一二）